

## 【日本側コーディネーター及び拠点機関名】

日本側拠点機関名	新潟大学大学院医歯学総合研究科
日本側コーディネーター所属・氏名	医歯学系（大学院医歯学総合研究科）・齋藤 玲子
研究交流課題名	アジアの熱帯亜熱帯におけるインフルエンザウイルスの動態と対策の検討
相手国及び拠点機関名	ミャンマー：国立医科学研究所（ネピドー） マレーシア：国立ケバングサン大学（クアラルンプール） レバノン：アメリカン・ベイルート大学（ベイルート） ベトナム：国立衛生疫学研究所（ハノイ）

### 研究交流計画の目標・概要

#### 【研究交流目標】

インフルエンザは、日本では冬に流行する。しかし、熱帯亜熱帯では一年中インフルエンザがみられ、特に暑い雨期に患者が増える。近年、ヒトの季節性A型インフルエンザの発祥地はアジアであり、世界全体に1-2年をかけて伝播していることが明らかになってきた。世界保健機関（WHO）はアジアから播種するインフルエンザに着目し、アジア太平洋地域のインフルエンザ・サーベイランスの強化に力を注いでいる。日本のみでの監視では、早期予測は難しく、広くアジアをカバーするネットワーク形成が必要である。

本研究では、アジアのなかでもこれまでインフルエンザの情報がほとんど無かったミャンマー、マレーシア、ベトナム、レバノンの4カ国に焦点をあて、インフルエンザ研究拠点の形成と交流を行う。

新潟大学は、文科省の感染症研究国際ネットワーク推進プログラム（J-GRID）のアソシエイト・メンバーである（ミャンマーのインフルエンザ・プロジェクト）。本課題を通じて、新しい季節性インフルエンザの早期発見を行いインフルエンザの伝播経路を解明することで、日本が展開する科学技術外交に貢献し、ひいてはインフルエンザのワクチン株の選択など、グローバルなインフルエンザ対策へ貢献する。

本課題とWHOのサーベイランスとの大きな違いは、我々のこれまでの調査研究を通じて、検体採取や、臨床的な情報が、直接的に得られることである。顔の見える関係のため、効率のよい調査ができ、かつ、将来有望な人材との交流が可能であり、アジアの研究拠点としての日本の重要性が示される。

#### 【研究交流計画の概要】

事業期間を通じ、日本人研究者が現地に年1-2回赴いて、関係国の協力者と調整をはかりインフルエンザの調査を行う。セミナーは、最初の2カ年には、アジアの4つの国から若手研究者を新潟大学へ招き、国立感染症研究所や北海道大学などの外部講師を含めたレクチャーと、実習形式のインフルエンザの技術研修を行う。最終年度は各国から複数名を招へいして最終報告会を日本（新潟）で行う。

- ① 共同研究： ミャンマー、マレーシア、ベトナム、レバノンの4カ国で、インフルエンザの迅速診断キット陽性の患者から検体を取り、現地の研究機関と協力してインフルエンザウイルスを検出する。それぞれの国のインフルエンザウイルスの流行時期を明らかにし、ウイルス遺伝子の配列を解析することで、ウイルスの類似性や流入の時期および経路をグローバルに推測する。インフルエンザの治療薬に耐性のインフルエンザウイルスの流行が国際的に問題になっており、本課題においてもこれまでほとんど情報が無かった4カ国で薬剤耐性インフルエンザを検出し、流行の兆しを監視する。
- ② セミナー： 4カ国の若手研究者を1-2ヶ月の短期間、日本（新潟）に招へいし、外部講師も招いたレクチャーと、インフルエンザやウイルス性疾患の検出技術を習得する実習形式のセミナー研修を行う。最終年度には各国の研究者を招き国際セミナーを日本で開催し、成果の共有と周知をはかる。
- ③ 研究者交流： 若手の研究者の交流を軸として、国際的な人材育成に努める。日本人の若手の研究者（助教や大学院生）を現地に派遣することや、セミナーで海外の若手研究者を受け入れる。日本でのセミナーは英語を使って行うことにより日本人研究者の国際力を高める。

**[実施体制概念図]**

アジアの熱帯亜熱帯におけるインフルエンザウイルス循環

